理　論　編

地球を見つめ，自分を見つめ，未来を切り拓く児童・生徒の育成

北海道国際理解教育研究協議会

平和に２１世紀を迎えようと努力してきた人類にとって，イラクでは戦争が続き，イスラエルでは人と人とを隔てる壁が作られ，そしてではアフリカ新たなジエノサイトの危険が叫ばれている現実をどうとらえたらよいのだろうか。子供たちが傷つき，生命を失い，教育を奪われる姿を目にするたびに，人類は滅亡の分岐点に立っているのではという思いに駆られる。ローマクラブが「成長の限界」の中で宇宙船地球号の危機を訴えてから３０年，今，私たちは一人の教師として一人の人間として貧困の撲滅と平和な社会の創造にむけて行動していくことがますます求められている。そして，子供たち一人一人が自分の生き方に誇りをもち，自分の未来と地球の未来に対して，責任を負うことができる自立した人間として育てることが２１世紀の教育課題として重要性を増しているといえる。

Ⅰ　研究の背景

国際化に対応した教育
↓
地球市民

私たちは，「急速に発展する国際化」を積極に受け止め，国際社会の中で日本人として自覚をもち，主体的に生きていく子供たちの育成をはかる研究を進めてきた。

この研究を通して，子供たちは身近な問題に参加することで，グローバルな意識が育まれ，いろいろな人々と共に地球に生きることの重要性を実感していくことを学んだ。また，教室の学びを開き，「地球市民」として世界の人々とともに課題を共有し，人類の幸せ，そして共に生きていく世界を考えることで，子供たちが自分の生き方を見つめ直し，自分の生き方を考える姿を創りだしてきた。

このように，子供たち一人一人に日本人として生きて行く力を育てるために，自分と世界とをつなぐ多様な文化を理解させるとともに，一人の地球市民として，様々な問題に対して自ら解決していていく力を育んでいく教育が問われているのである。

子供たちの変容
↓
未来に生きる方位磁針

学力がこれほど社会の注目を浴びたことはないかもしれない。しかし，我々がもっと注目しなければならないのは，精神的・社会的自立が遅れ人間関係を築くことができない子供の存在であり，進学も就職もしようとしなかったり，自分の人生に対する目的意識の希薄な子供たちの存在である。特に，かっては自分の夢を実現する手段としての学びが存在していたのに，その学びから逃げ出し，学ぶことの意味を獲得することなく大人になっていく子供たちが増えているという現実である。

この状況を打破するためには，子供たちが自ら，学ぶ意味を実感じ自分はなぜ、何のために、どのように生きるのかという未来への「方位磁針」をもった自分を獲得することが求められている。そして，そのために我々は，教室を地球に開き，子供たちと社会と結びけることで，子供たちが自ら地球という視点から自分の生き方を見直し，自分の生き方を創造していく学びの構築することが求められている。

II 研究で育む子供の姿

私たちは，これからの世界において，地球市民としての「生き方」を求めていこうと考えている。「日本人であると同時に，地球的な視野に立って行動できる人間」こそが２１世紀を生きる生き方の基本と捉えたからである。

では，そのような生き方を求めていくためには，いったいどのような資質や能力が必要とされるであろうか。

中教審の答申

1、 異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々ともに生きていく資質や能力の育成を図ること。

2、 日本人としてまた，個人として確立をはかること。

3、 相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思を表現できる観点から，外国語能力の基礎や表現力などのコミュニュケーション能力の育成を図ること

ユニセフ・「開発のための教育」

1、相互依存　世界のシステムを理解する力

2、イメージと認識
イメージとは他の国や人に対する概念であり，認識とはどう解釈するかを意味する。
すなわち偏見や差別を敏感に感じる力

3、社会正義　公平または人権について考える力

4、対立と対立の解釈　解決策の中で一番適切なものを探求する力

資質・能力

共生の心

同じ人間として，他者の存在を認め，信頼関係を築きながら，共感の心を醸成し，ともに問題解決にむかうことができる心。

異文化理解

多様性を理解し，互いのよさを認め合う態度。そして，互いを理解しようと積極的に他者にかかわろうとする意欲。

コミュニケーション

他者とのかかわりをもつためには，自分の考えを表現し，自分の考えや行動を柔軟に変化させていく共感的なコミュニュケーション能力。

人間として行動する力

人と人との関係のあり方や自分を見つめ直しながら自己の確立する力そして，地球市民として問題解決にむけて行動する力。

Ⅲ ・研究主題(平成14年～16年)

第六次研究では，子供たちが「地球市民」として生きる生き方を「異文化」とのかかわりとくに「地域と世界」とのかわりに注目して研究を進めてきた。

そこで，第７次研究では，子供たちが地球と積極的にかかわり「地球市民」としての自己を確立し，未来に責任のある行動ができる地球市民として成長していく過程を研究する。

第７次研究主題

地球を見つめ，自分を見つめ，未来を切り拓く児童・生徒の育成

（１） 主題設定にあたって

地球を見つめ、自分を見つめ

「地球を見つめ，自分を見つめ」とは，現代のグローバル化した状況において，子供たちは，その状況をしっかりと認識し，グローバル・イシュー（地球規模の問題）を自分の問題として捉え，その解決にむけて自分なりに行動する自分の生き方に対する思いとその生き方に対してしっかりと自信を持つ自己を育てなければならないと考えたからである。

地球を見つめる

子供たちは，「地球を見つめる」ことで，グローバルな視点で今の社会状況を理解しながら，今の自分が地球上の様々なものとかかわりながら生きていることを学ぶのである。そして，地球で起きている様々な問題が今の生活と結びついていることを実感するのである。

自分を見つめ

様々な対象との出会いそしてかかわりながら，子供たちはかかわった対象と対話を開始する。「自分を見つめる」とはこの対話を通して，多様な生き方と出会い，自分と対象と比べながら，どのような生き方にも価値があること，実感させることを願ったからだ。そして，自分にとってなにが大切なのか自己決定していく力を育んでほしいと考えた。

自己の確立

このように「地球を見つめ、自分を見つめる」ことで自分の生き方に価値を見出し，未来への方位磁針を持った子供たちは，ひとつのものの見方や考え方にとらわれることなく，他者の違いを認め，そして他者を尊重できるようになる。

こうして，自己を確立した子供たちは，共に学び合いながら，地球市民としてグローバル・イシューの解決にむけて前進できるようになるのである。

未来を切り拓くとは

子供たちが，これから生きていく２１世紀はどんな社会であろう。予想をたてることは非常に困難である。

「未来を切り拓く」とは，このような時代において，一人の日本人として生きていくためは，自分の生き方に誇りを持ち，地域とかかわりながら，自ら問題を見出し，その解決にむけて，判断そして行動していくことが必要だと考えたからである。

地球を見つめ，自分を見つめることで，自分が生きている社会をしっかりと見つめることができた子供たちは，未来への方位磁針にしたがって，様々な課題と出会い，様々な問題の解決にむけて行動を始めるのである。

未来を描く力→方位磁針

「教育の在り方は，全ての未来をどうとらえるかから始まる。」といったトフラーの言葉に代表されるように，子供たちが自分の未来を描く力をつけることは学校目標の目的の大きな一つである。

子供たちは「未来」を描くことで，自分の夢を広げ，異なることが豊かだと受け止められる社会の姿や，一人一人の人権が大切にされる平和な地球の姿を，現実の社会と比較しながら持つことができる。

そして，その「未来」を実現させるために，自分は社会とどうかかわっていけばよいのか，そして，どう働きかけたらよいのかと主体的に社会とかかわりを始める。このかかわりを通して，子供たちは様々な生き方と出会い，人間としてどう生きていけばよいのかを学んでいく。

行動すること

地球環境の大切さやリサイクルの必要性を理解していても，実際に自分が飲んだ後のペットボトルや空き缶をポイ捨てしているのでは地球市民とはいえない。

これから直面するだろう地球規模の課題は，いくら知識や態度が身に付いていても，その課題を自らの問題として，解決にむかって行動しなければ意味はないのである。

全ての人々が，グローバルな視点を持ち，問題に対して判断し，問題解決にむけて，まず自分の生活から解決にむけて行動しなければならない。また，そうしなければ２１世紀の人類は立ち行かないといっていいだろう。

共に歩む解決への道

問題を解決しようと試みる時，子供たちは，一人ではなく，仲間とともに問題に立ち向かうことになる。その解決への道は容易なことではない。

まず、相手の立場に立って，立場を考慮しながら，自分の考えや意思を相手に正しく伝え，そして，相手の考えや意思を正しく受け止めることが必要である。コミュニュケーションができて初めて，自由な意思の疎通が生まれ，共に生きる社会のために，みんなが納得する解決方法を生み出すことができるのである。

このように，問題解決にあたっては，異なる考えを持つ人と「心」と「心」を通い合わせるかかわりがまず必要となる。

Ⅳ　主題実現への道

第６次研究（平成１１年から１３年）では，「共生の心」をもった子供たちが，地球市民という立場から，どう問題を見出し，働きかけ，そして問題を解決していくかという問題解決の過程に注目して研究を進めてきた。

そこで，第７次研究では，この「地球市民としての生き方」を育んでいく研究をさらに一歩進め，子供たちが地球とのかかわりながら地球市民としての自己を確立していく過程を，子供たちの問題解決の姿の中に求めながら研究を進めていくことにする。

めざす子供の姿

地球市民として問題解決する姿

地球市民として，異文化を尊重しながら，地球上の全ての人々とともに地球の未来のために行動ができる子を育てたい。

特に次の２点に姿に注目する。

○　問題解決が地球市民として価値あるものであるか。

○　問題解決の過程の中で，子供たちは共に生きることを学んでいるか。

めざす授業の姿

地域から地球とのかかわりを求めて

私たちは子供たちが問題解決をしていく姿に注目していく。そのため，授業においては，「何かを理解させる」というような知識の量や結果を問うのではなく，問題解決の中で子どもたちが悩みながら一歩一歩解決への道を歩むプロセスを大切にしていきたい。

特に，共に生きることを学ぶためには，多様な考えを持つ人と出会い，その違いを乗り越えながら，共に目標を作り，そしてみんなが共に納得できる解決への道を歩むこと大切だといえる。そのため，授業の中では，教室の中だけではなく地域，そして地球へと広がるネットワークの中で解決にあたりたい。

そこで，今研究では子供たちと地域のかかわりに注目したいと考える。地域を学びの場とすることで，子供たちは現実の問題に直面することになる。学びの有効性を実感しながら自分と地域，そして地球を見つめさせていきたい。

V 研究の視点

視点 1

子供と地球とのかかわりを作る教材づくり

子供たちは，すぐにグローバルな視点から物事を見つめることは難しい。私たちは，学びの場において，子供達が繰り返し地域と地球とのかかかわりから「地球」に思いをめぐらす瞬間を体験できるようにしなければならない。

この体験を通して，子供たちは自分中心の見方から違いを違いとし，違いを豊かなものとしてとらえる相対的な視点，そして，すべての「人・もの」を共に地球に存在するものとしてみる地球的視野を育てていくのである。

このように，身近な地域を教材化することで，子供たちは「自分」と「地球」を出会い，地球市民としてさまざまな人と共に暮らすことができる力を育むこととができるのである。

教材作りのポイント

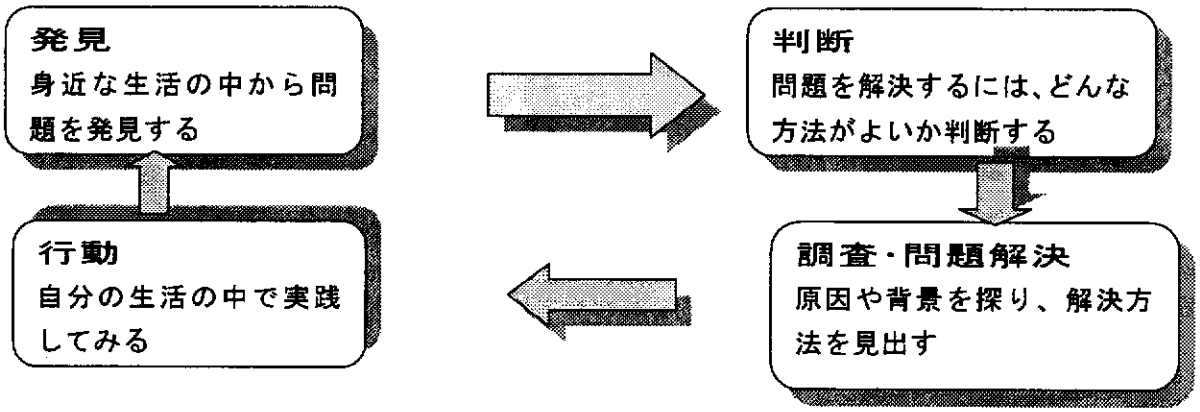
私たちが，子供に出会わせたいと考えている問題は，地域の問題でありながらその背景には地球レベルでの広がりが内在しているものである。また，子供たちの学習での取り組みでは，知識の量を求めるのではなく，問題を追求する過程と解決に向けての行動を大切にしなければならない。

ポイント１

追究の対象は，子供の生活の中に存在する。そうすることで子供たちは問題を自分ごととして捉えることができる。そして，繰り返しかかわることで，自分で調べたり，調査したりしながら自ら問題解決にあたることができる。

ポイント２

子供の認識と行動の連続性を図ることが求められている。したがって「発見→判断→調査・問題解決→行動」という連続した活動が連続して構成されなければならない。

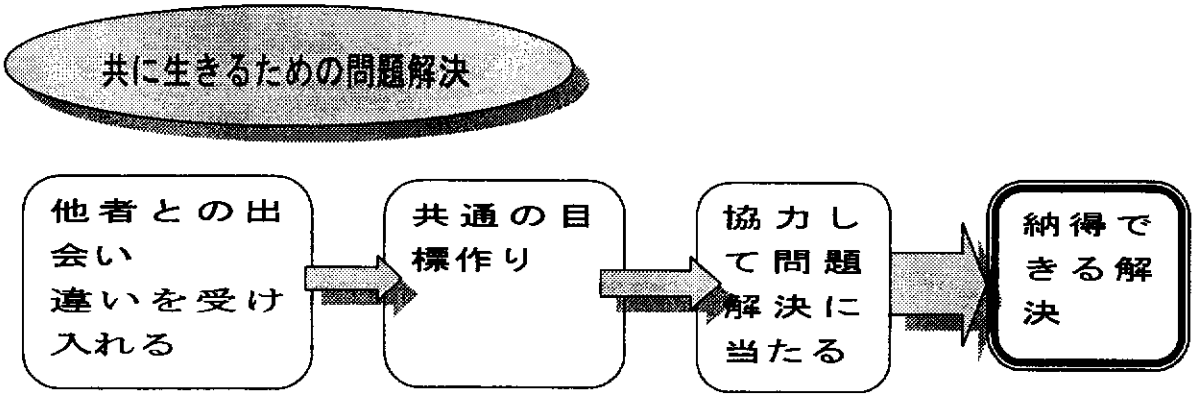
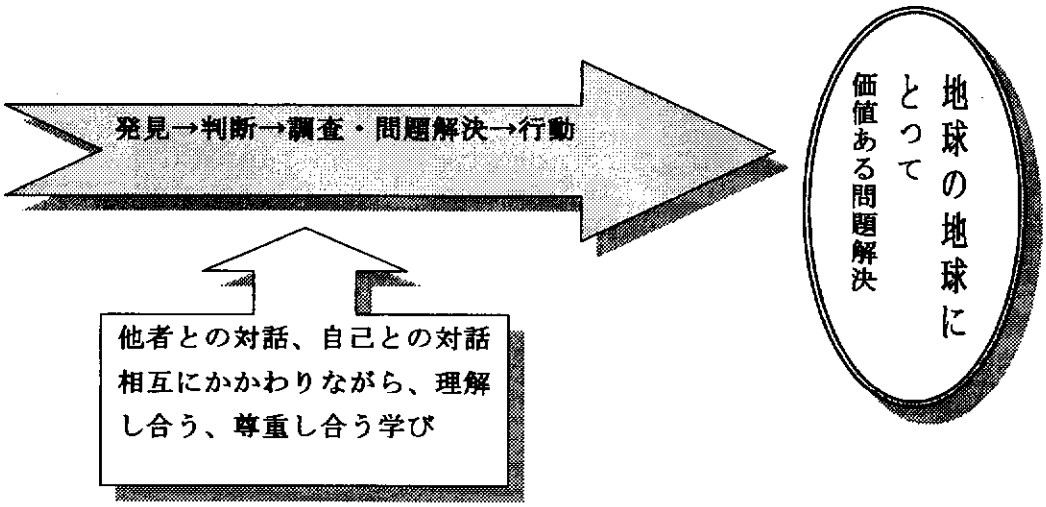


視点　2

地球市民として問題を解決していく学習活動の構築

未来を切り拓いていく子供たちを育てるためには，子供たち一人一人が，問題の状況を理解するだけでなく，問題について自ら解決方法を見出し，行動していくことが求められる。

また，これからのグローバルな社会では，まったく違う利害をもった人々との問題解決が求められる。すなわち，従来のように互いの意見を折半したような解決だとともに不満が生まれ互いの納得は生まれない。地球市民という視点から、全く新しい発想で問題解決しなければなれば共に納得する状況はできないと考える。



そのため，今回の研究では，問題解決が地球市民としての視点をもっているばかりでなく，その問題解決の場においても上記のような共に生きるための問題解決が行われていたかも注目する。